

セツ しん

NO.98



ひと ことば

草花に学ぼう

菅井

仁 (センター運営委員)

手前味噌になるが、センターのホームページにある「日記&ブログ」のコーナーが面白い。そこへ毎月2回、会員の千葉さんから「季節のたより」が届くようになって丸2年。これまで48種の草花が紹介されてきた。身近な植物の美しい写真と、何よりもそこに添えられる文章に、読者は魅了されると思う。単なる植物図鑑ではない。人々の生活や文化と切り結んだ解説がユニークなのだ。もちろん草花そのものの生き残る仕組みにも驚かされる。

その仕組みは、環境の変化に対応し、開花の時期をつらし、背丈を変え、花の色も変えるなど、多様性を広げてきたということになる。

それに引き替え、人間はどうなのか。とりわけ学校教育は多様性どころか画一化が進む一方である。個性重視といいつつスタンダードといって、教師にも、子どもにもみな同じことが強いられる。そんなことを「季節のたより」から学ばされる。つうしん読者の方にも「日記&ブログ」コーナーを覗いてみてほしい。

目次

ひと言	菅井 仁	1
山極寿一さんの高校生公開授業 概要		
「サル化する人間社会 ～ゴリラから学ぶこと」		2
高校生の感想から		8
ゴリラの住む森から学ぶ非言語の世界の広がり	里見まり子	9
言語以前のコミュニケーション	本川 良	11
公開授業を振り返って	春日 辰夫	12
教育時評		
35人学級実現の道	渡辺 孝之	13
私の出会った子どもたち		
子どもが笑顔になる教室	中野 典子	15
シーちゃんのこと	佐藤 正夫	15
生きてくれているだけで幸せ	高橋 三代	17
子どもと学校		
未来へのトライ	近藤 彩香	18
わたしの出会った先生		
29 山口先生	高木 克純	21
相談センター報告 第20回		
相談センターからの旅立ち	松谷三喜子	22
おすすめ映画		
「ある少年の告白」	佐々木忠夫	24
センターの動き		24

山極寿一さんの高校生公開授業 概要

サル化する人間社会 〜ゴリラから学ぶこと

序、霊長類学との出会い

日本の霊長類学やサル学をつくった山極さんの師匠のそのまた師匠である今西錦司さんは、人間以外の動物も社会を持つているということを言い出した。これは欧米の動物学者や一般の人々の思想からはとんでもない発想だった。当時は社会や文化は言葉によってできるものだから、人間だけが社会や文化を持つていて、言葉を持たない動物は社会や文化を持つていない。それが常識だった。

だが今西さんは言葉以前に社会はできたはずで、そのプロセスを調べたいと言い出した。今西さんはシートの動物記をモデルにし、一頭一頭のサルに名前を付け、サルの個性の集積としてサル社会を理解しようとした。当初、世界は受け入れなかったが、20年後には欧米のすべての学者が一頭一頭のサルに名前を付けて研究するようになり、ジャパニーズ・メソッドと言われるようになった。

I、人間家族の起源を探る

類人猿の中でゴリラが一番人間家族の原型に近い社会を持つている。父親にあたる大きなオスがいつも偉そうにし、赤ちゃんを抱えたメスがいて、子どもたちがいる。いつもぐちゃっと固まって休んでいる。固まって仲よく暮らしているのがゴリラ。ニホンザルのオスは歳をとると群れから追い出されてしまうが、ゴリラのオスは決

して追い出されない。老後は、いつも子どもたちに見守られて楽しく寿命を終えるまで過ごす。敬老精神にあふれている。これがゴリラ社会の特徴である。

ゴリラは威張るのが大好きで、お互いに強い弱いというのを認め合わない。また目立つのが大好きで、何かと自己主張する。重要なのは負けず嫌い。例えば、オス同士が喧嘩しようとする、まだ若い小さいオスがあいだに入ってきて仲裁をする。そうすると喧嘩をやめてしまう。

闘えばどっちも譲らないからエスカレートして死に至るような大げなことをすることになる。その時、自分より若いオスでも《まあ、まあ》と仲裁してくれば、面子をもって引き上げられる。この面子がゴリラにとってすごく重要です。ゴリラにとって負けないでいることは相手と対等であることだから、対等であるためにみんながんばっている。この方が仲間を得られる。誰かが仲裁してくれば、今度は自分が誰かの仲裁をする、というように仲間同士のバランスを互

10回目を迎えた高校生公開授業は、山極寿一先生（京都大学・総長）に引き受けていただくことができました。

授業は、霊長類学との出会いから始まり、人類の今日の問題まで、サルやゴリラの調査研究の成果を踏まえ、興味深い話が次々と展開されながら進められました。本稿では字数の制限から、8つの項立てを中心に概要を報告します。全体の記録は後日、ブックレットにして発行する予定です。

（文責・事務局 菅井



いに取り合うことよって仲間の数が増える。負けないでいることは、勝とうとすることは違う。勝てば勝つほど仲間はいなくなる。負けないでいることは仲間が増えるということにつながる。ゴリラは、仲直りがすごく頻繁に出てくる社会に暮らしている。

II、ゴリラは食物を分配する

オランダ人のグループが食物の分配をめぐってある仮説を立てた。サルの間は基本的に分配は必要ない。熱帯雨林に棲んでいる限りいくらでも食物はあり、分配せず自分で採せばいい。そこに類人猿のような子育ての負担が大きく、成長に時間のかかる種が現れて、子どもに分配するという行動が出てくる。その子どもにも分配する行動から大人同士の分配に波及して、最後、人間一種類のみが、全然見たことのない相手に対しても食物を分配するという行為が生まれた。これは人類の祖先がサルや類人猿が進出していない、食物の不

足している地域に進出したことよって起こったに違いない、という仮説です。正しい仮説だと思ふ。だって人間はサルの棲んでいないところにも住んでいて、人類はどこでも食物を分けるということをやっている。食物を分配するというのが人間社会の根本原則になっている。

ゴリラ、チンパンジーは食物のある場所で分配する。だから食物の在り処をみんなわかっている。だけ人間は食物を運んで分配するから、食物の在り処を見ない。ひよつとしたらその食物は危険な物かもしれない。人間は食物を信用するのではなくて、仲間を信用して食物を食べている。仲間が持つて来てくれることを期待する。つまり見えない食物を欲望するという人間独自の欲求が生まれ、そこに情報が絡んでくる。どこで、いつ、どんな物を探ってきたか、これは情報です。そして食物を平和に食べることよって、お互いの間に共感が生まれる。この共感こそが人々をつなぐ力の源泉です。

III、脳の大きさが物語ること

人間はゴリラやチンパンジーに比べて脳が大きい。人間の脳が大きくくなった理由は何なのか。長い間、脳が大きいことは当然知性が高い証拠で、その知性を創ったのは言葉、だと言われてきた。人間だけが言葉を話す。言葉を話すことよって脳が大きくなった。様々なものに名前を付け、そういう記憶を頭の中のためにため込む。それで容量を増やす必要ができた。ところがそれは間違いだと最近わかってきた。実は言葉は脳が大きくなってから現れた。言葉が登場したのは今から7万年ぐらい前だと言われている。人類の進化は700万年間続いている。では、いつ人間の脳は大きくなり始めたのか。200万年前にゴリラの脳の大きさ500ccを超えて600cc以上になった。さらに脳はどんどん大きくなり、40万年前に現代人の脳の大きさに達している。現代人のホモ・サピエンスが現れたのは20万年前。それ以前に登場したホモ・ハイデルベルゲンシスという



のが1400ccの脳を持っていた。脳は大きさからいえば、ホモ・サピエンスより前に完成している。

では一体何が脳を大きくしたのか。イギリス人の人類学者ロビン・ダンバーやサル学者、人類学者が脳の大きさと人間の行動の相関関係を調べた。その種が暮らす平均的な群れの規模が大きければ大きいほど脳の大きさが大きいということが分かった。そしてサルの脳が大きくなったのは、社会的複雑さのためで、社会脳として大きくなった。人間は言葉をしゃべる前に脳を大きくしたのは、おそらく他のサルと一緒に理由で、仲間の数が増えたからではないのかということが類推できる。

またダンバーは脳の大きさの推計値から当時の人類の平均的な集団の規模を算出した。まず200万年前に脳は大きくなった。ゴリラの平均集団サイズの10人から20人ぐらいです。それが600ccを超えて30人になった。そして1000ccを超えると50人ぐらいになる。それが段々大きくなって現代人の1400ccから1600ccは150人ぐらいの集団サイズという数が出た。

ここからは推測ですが、これまで人間は脳を大きくするとともに、付き合う仲間数を増やす方向に進化してきた。その結果として言葉が現れた。しかし未だに、われわれの社会は言葉を使わないでままれる集団規模を持っている。ゴリラと同じ集団規模の集団がある。それは10人から15人のスポーツの集団。ラグビーやサッカー、野球などです。これを私は共鳴集団と呼ぶ。試合になると言葉を発する余裕はない。目くばせか仕草で相手に自分の動きを伝える、意図を伝える。仲間は瞬時にそれを理解して動く。その仲間の動きを見て、また自分も動く。その動きの積み重ねによってチームプレーが生まれる。その間に言葉は介在しない。ゴリラも言葉をしゃべらないのにまったく一つの生き物のように群れが動きます。それは人間でもできるわけです。次の30人から50人は学校のクラスサイズです。これは誰かがいなくなれば即座にわかる。先生が一人でクラスをコン

トロールできる。会社で言えば一つの課、軍隊の中隊もこのサイズです。これも言葉は介在しないで、顔と顔との突き合せによって身体が同調できる数です。そして現代人の脳が行きついた150人という数は社会的共通資本みたいなもので、過去と一緒に何かをした記憶、喜怒哀楽を共にした記憶によって顔が頭の中に埋まっている数です。そして、その顔が浮かんだ人たちというのは何か自分がトランプに陥った時に、疑いもなく頼れる相手です。だから社会的資本なんです。そういう数をずっと人間は持ってきた。

IV、家族と共同体の二重構造

我々は日常的に言葉を話さずに身体を同調させることができる共鳴集団、10人から15人を持つている。家族というのは、小さいころから一緒に暮らしているから、後ろ姿を見ただけでその気分がわかる。その外に150人を上限とする音楽的なコミュニケーションによってなる集団がある。地域共同体です。なぜ音楽的コミュニケーションと言いかというと、例えば食べ物や着る服が一緒、お祭りなどの伝統文化、これはリズムやカラーなど視覚や聴覚のコミュニケーションで成り立っている。言葉ではなく、身に染み付いた文化を共有することによって安心感を得ている。そういう音楽的コミュニケーション、共感能力によって担保されているような共同体がある。その外に、やっと言語的コミュニケーションによって現れる人々のつながりがある。これは、おそらく人の移動や集団サイズが急激に大きくなったことによって、言語を使わなければコミュニケーションが成り立たなくてできた集団だと思えます。共感能力をつくった背景には、人間が持っている子育ての不思議さがあると思う。

V、人間の子育ての不思議さ

ゴリラと人間の成長の仕方を、誕生から死ぬまでを4つの期間に分けることが出来る。おっぱいを吸ってる乳児期。離乳して、おと

なと同じようなものを食べられるけど、また繁殖はしてない少年期。繁殖をしてる成年期。繁殖から引退する老年期。だけどそれぞれ長さが違う。ゴリラは3年から4年、お乳を吸っている。人間の赤ちゃんは1年から2年でお乳を吸うのを止めてしまう。そしてゴリラもチンパンジーもお乳を吸い終わったときには永久歯が生えている。だけど人間の赤ちゃんは離乳したとき永久歯は生えてない。6歳位まで生えてこない。だからこの時期の乳歯をもった子どもだけが食べる、離乳食を与えなければいけない。

何で離乳食を与えてまでお乳を吸うのを止めてしまうのか。人間の赤ちゃんが乳歯のうちに離乳してしまうのは、おそらく人間の祖先が熱帯雨林を出たことに起因する。熱帯雨林は食物が一年中豊富なので飢えない。熱帯雨林を離れたら乾季が長くなるから食物を得られない時期がある。そのため広い距離を歩きまわり食物を探し回らなければならぬ。だから食物を採って運んで、仲間と一緒に分配する行為が大きな価値をもった。

もう一つは、熱帯雨林を離れたら安全な場所を確保しにくくなる。その結果、幼児が肉食獣に狙われ、死亡率が上がった。高まった幼児死亡率をカバーするために、人間はたくさん子どもを産む必要があった。多産であるためには二つの方法がある。イノシシのように一度にたくさん子どもを産む。もう一つは出産間隔を縮めて、一定期間内に何度も子どもを産むという方法がある。でも毎年子どもを産めば、自分の生まれた子どもを育てる間に次の子が生まれてしまうから、成長が早い子どもを産まなければいけない。でも人間は類人猿と共通の特徴をもって進化してきたので、すぐに子どもの成長を高める訳にはいかない。だから成長の遅い子どもを何度も産むということになった。そのためには赤ちゃんをおっぱいから引き離せばいい。おっぱいをやっていると、おっぱいを探すプロラクチンというホルモンが分泌されます。このホルモンは排卵を抑制するので妊娠ができない。赤ちゃんがおっぱいを吸わなくなればプロ

ラクチンを分泌しなくなると排卵が回復して次の子どもが妊娠できる。そういうことを意図的にしろ無意識にしろ、始めたに違いない。

次はなぜ赤ちゃんは重たいのか。それは体脂肪率です。体脂肪が分厚いのは脳を守るためです。200万年前に脳が大きくなり始めた。はじめから大きな脳の子どもの産めば、ゴリラの子どもの同じ成長速度で発達できた。ところが人類はまず直立二足歩行を始めた。500万年間も直立二足歩行をしたあげく、脳を大きくした。その間に何が起ったかという点、直立二足歩行を効率的に進めるために、骨盤の形が変わってしまった。骨盤が皿状になって、上半身の重さを受け止めなければならなくなった。それで横に広げられず、犠牲になったのが産道の大きさです。産道の大きさを制限することによって効率のいい二足歩行を完成させた。だから予め胎児のうちに脳を大きくすることができず、脳の小さな子どもを産んで、生後、一気に脳を大きくする。そのために脂肪を蓄えておいて栄養のバランスが崩れたら脂肪を燃やすという戦略にでた。人間の脳は3段階で成長する。1年で2倍、5歳までにおとなの脳の90%になって、それでも成長を止めないで12歳から16歳で完成します。そのため赤ちゃんの頭骨は真ん中はプカプカです。脳が急速に大きくなるから、その分、広がるようにできている。子どもの成長が遅いのは、脳が優先されて大きくなったからです。人間の赤ちゃんの成長というのは、まず脳の成長を優先させて、本来なら身体の成長に使われるエネルギーを脳の成長に回しているから身体の成長が遅れるわけです。

人間の子どもの成長というのは早い離乳と遅い成長に特徴づけられていて、とりわけ離乳期と思春期スパートの時期というのが重要であり、これを支えるために母親あるいは父親だけでは手が足りなくなると、共同保育、つまり家族と共同体という組織ができた。だから家族や共同体の人々をまとめている接着剤は子どもであり、共同保育という実践行為だったということです。その実践行為が必要になったのは、人間が熱帯雨林の外に生き延びるために生物学的に

身体を変えたことがその理由になる。

また700万年前にヒトが直立二足歩行を始めた理由の中に、自由になった両手で食物を運んだことが重要な要素だと言われている。そして森林を後にしてサバンナへ出て行き、そこに生き延びるための多産性の獲得というのが重要になり、やがて脳が大きくなる。脳が大きくなった理由は集団のサイズを高めていったせいでしょう。

VI、言葉・歌・絵画の誕生

もう一つ、人間は赤ちゃんと離れて育児をするために、新たなコミュニケーションを発達させた。それは音楽です。赤ちゃんは重たいし、自力でお母さんに捕まれないから、お母さんはすぐ離してしまふ。誰かに預けたり、どこかに置く。すると赤ちゃんは大声で泣く。その泣き声を聞いた周囲の人は、誰もが赤ちゃんを泣き止ませようと努力する。優しい声を投げかける。これは音楽的な行為です。しかもこの音楽的な行為は習わなくても誰もができる。ピッチが高く、変化の幅が広くて、母音が長めに発音されて、繰り返しが多いという特徴を持っている。これは子守歌に典型的に表れる音調です。そして赤ちゃんは、その音調を聞いています。音の高さをきちんと理解できる。絶対音感をもっている。そして言葉をしゃべるようになる3歳くらいになると、絶対音感が消えて相対音感になる。なぜならば言葉というのは、音程の違いによって意味を変えてはいけませんからです。

そういう音楽的な語りかけが音楽になる。音楽の効用は、赤ちゃんがお母さんと一体になったように感じ、自分が守られているというふう感じて安心するためのものです。そしておとなの間にも、垣根を越えて一体になるような効用が音楽によって生まれた。だからそれは新たな協力、一体化する、心をつなぐという人間独自の精神構造を生んだ。昔から何か苦しい仕事を一緒にするときには、みんなで歌を歌う。どこでもそういうことが行われてました。歌と

いうのはそういう力を持っている。

言葉というのは大変な革命をもたらした。言葉によって意味が付与された。それまでは気持ちを伝え合うためのコミュニケーションでした。ところが意味が付与され、時空間が一気に広がります。なぜかというと言葉というのは重さがない。あえて物を運んだりしてミスる必要がない。過去にあったことを現在に伝えることができる。遠くであったことを、伝えることができる。それが言葉の交流です。そして音楽と言葉が結びついて歌が生まれた。歌はメッセージを持つようになった。それまでは気持ち一つになるという効用しかなかったのが、歌によって目的ができた。そして模様と言葉が結びついて絵になりました。模様が意味を持つようになった。それは人間の世界の解釈の仕方を大きく変えた。世界最古の楽器といわれている笛が4万年前に登場します。つまり7万年前に言葉が登場してから楽器が生まれているわけです。洞窟の壁画も4万年前に登場している。最初は手形から、それがだんだん動物の精巧な絵になる。それが芸術という形で高められるわけです。芸術の必要条件というのは、それまでに人類が培ってきた自己主張する能力、高い共感性、同化した同調したいという願望。そして世界を解釈したいという欲望。人や物に憑依したいという能力、無いものを想像する能力。そしてとりわけ繰り返し繰り返しその場所にやってきて、繰り返し同じ仲間と付き合うという、定住とコミュニケーションをとる場所の安定性というのがあって、初めて芸術というのが意味をもってきたのだと思う。

ところが、今、我々が直面している事態は、長い長い年月をかけて培ってきたこういう能力が一気に大きく変化しようとしている時代だと思う。元々、脳の中には意識と知能というものがある。それは決して分離することができないもので、感情と知性・知恵と言いは換えてもいい。そして認知革命は、この知能だけを分離して情報に変えて、それを人工知能に移し替えるようになりました。感情は情

報になりません。例えば「好き」と言っただけで、なんで好きか分からないわけです。好きというのをいくら情報に変換しようとしても、人工知能には移し替えられません。でもどんどん技術が高まれば高まるほど、この情報化した人工知能の方に人々が依存するようになる。この情報化はなぜ起こってきたかという人口が急増したせいです。

VII、地球環境の変化がもたらすもの

地球社会の人口は76億を超えました。同時に家畜ではウシは15億、ヒツジは12億、ヤギは10億、ブタは10億、ニワトリは500億です。一方、野生動物のゾウは62万、チンパンジー30万、ゴリラは20万しかない。つまり地球上の哺乳動物の9割以上はヒトと家畜が占めるようになってしまっている。

プラネタリー・バウンダリーと言って、地球環境がこれ以上悪化すると地球が破滅する、その限界値を示した指標がある。9項目あります。遺伝的多様性、生物多様性と言ってもいいが、これが限界値を超えている。窒素とリンの量が限界値を超えている。地球の温暖化は、二酸化炭素を排出する量が増え、温暖化が進むとさらに悪化します。人間の身体と人間の社会を振り返ると、これも悪化しています。少子化によって乳がんや子宮がんの発症率が上昇している。ジャンクフードによって、過剰な糖を取り過ぎたり、内臓脂肪が増えたり、肥満が増えたりということが起こっている。オフィス・ワークが増加することで運動不足が生じて身体が変調をきたしている。毎日インターネットやテレビを見ているために視覚環境が変化しました。目が寄ってしまったり、目が悪くなったりする人が急増している。ストレスが増えた。睡眠不足が増え、睡眠導入剤を飲む人が増えている。薬を多用して、そのため腸内細菌層が劣化し、精神的な病になったり成人病が増えたりしている。その結果、成熟は早くなり、歯は小さくなり、顎は短くなり、髪は細くなり、足は扁平になる。虫歯が

増えたのは食生活の変化です。

VIII、サル化する人間社会

1970年から2010年までの40年間に、世界で感染症と栄養失調で死亡する人の割合は17%下がった。平均寿命は11年延びた。でも非伝染性の病気で死亡する人の割合は30%増えている。身体だけでなく心や社会も急激に変化している。とりわけ家族や共同体という二重構造が狂い始めた。家族や共同体という二重構造が現代社会で意味をなさなくなったわけではなく、通信手段や食生活が変化して、食生活という行為は人々をつなぐ行為であり、社会性の原点にあった。それが孤食になった。インターネットで注文できる。コンビニエンス・ストアに行けば、好きなものを好きな時に好きな場所で食べられる。そして人々は、実際に会うよりもインターネットやスマホで付き合うものだから、身体と身体が触れ合わなくなった。とりわけ少子化と連動して、家族と共同体という二重構造を支えていた共同の子育てが減ったということも大きいと思う。それを私は「サル化する人間社会」というふうに表現してみた。

子育てが経済的な指標になり、母親にだけその負担がかけられている状態を何とかしようとして、経済的にそれを解決する仕組みを作ろうとしているからです。その結果、家族という見返りを求めない人々の紐帯が薄れて、集団原理のみの社会になっていく。集団原理というのは、効率化を必ずめざす。最も効率がいい話はサルの社会です。なぜならばトラブルが起きる前に、優劣でもって防いでしまう。劣位の者が自分を抑制する。優位な者に独占させることによって、トラブルを未然に防いでいる。それが最も効率のいい社会です。そうすると共感能力を使う必要がなくなります。相手と自分のどちらが強いかだけでいい。相手と自分の過去の関係がどうなっているのか。あるいはこれからどうなっていくのかと考える必要がなくなる。そうすると信頼関係も消失する。信頼関係を担保にして、人間

関係をつくる必要がなくなるから仲間の作り方が変わっていく。仲間は自分の利益を高めてくれるはずである。仲間を組んで集団を作っている以上、集団の外にいる人間は自分たちの利益を犯す可能性があるから排除していこうという話になる。そうすると集団というのは利益共同体になって閉鎖的になる。日本もそうなりつつあると思う。

個人がばらばらになり、個人が裸で政治に付き合わされている。人々が仲間を頼るのではなく保険に頼っている。生活を切り詰めて保険料を払うことによって将来の自分を確保しようとしている。そうしなければ自分を守れないと思っている。社会というのはそれだけ不安になってしまっている。その結果として個人個人が個性を持って付き合うのではなく、個人が情報化して、どれもが情報としてフラットで均質なものになりつつある。それがまさにプラットフォーム企業が暗躍する社会、たと思います。

簡単に言うと、我々は今、デジタル時代になって、身体をつながらではなくて情報を介在して生きるようになった。つまり脳のつながりだけで人間がまとまるようになってきているということなんです。その結果として、我々はリアルな空間、フィジカルな空間ではな

高校生感想

■固定観念を覆す研究に驚かされました。動物園で見るゴリラは身近に感じていましたが、野生の姿を通して、群れの中で家族を愛していたり、食事を分け与え、喧嘩を仲裁したり、威張ったりする新しい面を知ることができ、面白かったです。ペット飼育に見られるように、人間は動物と親しむことができるのに、現在は遺伝子を操作して人間に都合の良いように作り替えようとしているという話を聞き、自然の共生について考えさせられる場面も

の人々を受け入れて共生していくことで、現在起きている紛争なども少しずつ減らしていけるのではないかなと思っただ。ゴリラは凶暴な動物ではなく、人間の本来の姿を示してくれている。人間が学ぶべき動物だった。

■インターネットを利用し、今の生活が当たり前で便利な時代だと感じていたが、人間としての能力の低下が見られるので、自分で考える生活の空間の必要性を強く感じた。ゴリラのように、生き物の生態を調べること、他のも

の人間関係や社会全体の風潮を改めて自分自身の中で考え直してみたいと思います。

■サルやゴリラのことを学び、人間社会の特徴や問題点など、いろんなことが浮かんできた。特に印象に残ったのは、ゴリラは負けず嫌いで、常に負けようとしていないこと。「負けたくない」ということは、勝とうとしているわけではないこと。この二つが、人間社会では混同しているのだというお話がとても印象的だった。負けたくないという

くて、バーチャル、フィクションの中に生きています。例えば、どこかに行こうと思う時にスマホのナビを出して目的地を入れる。そうすると地図を出し経路を示し、その通りに歩いていくと目的地に着く。以前ならいろんな風景を頭の中に入れながら、経験や聞いたことと照らし合わせて目的地を探してた。ということは自分が実はスマホの中に入り込んでいて、そのバーチャルの空間の中で歩いているわけです。リアルな空間を見ていない。そういう事に現実的になりつつあると思います。

IT時代なので必要な知識はいつでもどこでもインターネットで得られる。知識は人から教えられるものではない。そう考えがちである。同時に仲間とは常時つながりたい。だから携帯を常にオンにしている。でもその結果、自分一人になって何か物事を考える時間がない。どんどん不足して行く。友だちに頼るから、自分で決定できなくなっていく。そのため他者と顔を突き合わせて何かを議論したり、新しいことを生み出そうという契機がどんどん少なくなっているんじゃないか。それは結果として共感力を醸成したり、共感力を使う機会が減って行くことになるのではないかな。



高校生感想

ありました。共感力や五感というものを大事に、意識して他者との「コミュニケーション」を育みたいと思いました。

■授業テーマの『サル化する人間社会』というのは、現代の社会的地位が確立された社会や、相手（他の国の人々、周りの人々）と共生できなくなっている社会を示しているのだと思う。ゴリラのように他の動物と共生すること（人間で言えば他の国の人々や周囲

の）と関連させ、新たな発見ができること、とても面白さを感じた。

■今まで知らなかったサルやゴリラの生態について、また人間との関連性について、山極先生のとて魅力的な経験に基づき貴重なお話をうかがえる機会に参加でき、本当に良かったなあと思いました。授業で知ることができた皆さんの知識を踏まえて、今まで当たり前だと思っていた日々の生活の中で

して相手と対等な関係を保ち、また新たな関係をも育み、その上で個人の優劣をつけないというゴリラ社会は、人間も見習う価値が大いにあると感じたし、人間社会の理想の一つではないかと思った。

ゴリラの住む森から学ぶ 非言語の世界の広がり

里見 まり子

2007年に京都で開催された「芸術は何処へ」の連続講座の最終日、7人の講師によるパネルディスカッションがあった。

その際、聞いた山際寿一氏の話は私も鮮明に思い出す。山際氏は、アフリカで現地の人々と共にゴリラを追ってジャングルの奥深く入って行った。その日は、ゴリラに出会うことができず、やがて日が暮れてしまった。暗闇の中、どのようにしてベースキャンプに戻ればいいのか……。すると現地の人たちが靴を脱いで足裏で地面を探りはじめたという。足裏で根っこの伸びている方向を確かめて自分たちの進むべき方向を判断するのだ。そうして足裏の感覚をたよりに一団はやがてベースキャンプに無事辿り着くことができた。そしてその帰り道、暗闇の中で光っているものがあったと近づいてみるとそれは、光り輝く苔だった。一旦視覚を失った後に見た光る苔は本当に美しかったと山極氏は語った。この話を聞いた時、私は、身体の可能性と五感の持つ素晴らしさに心を打たれた。

私は、教員養成大学に勤め、身体表現やダンス教育に携わってきた。

その中心にあったのは、「からだの感覚の覚醒と解放」というテーマであった。私が授業実践を通して目指したのは、身体を軸に感覚のアンテナを伸ばして、他者や外の世界と対話しながら踊り、歌い、遊ぶからであった。

例えば「足の授業」では、靴をはきアスファルトの上を歩くことで失われた足裏の感覚を呼び覚まし、踊る足を蘇らせるために、みんなで足形をとって床に並べて、足裏と床との関わりを捉え直したり、触感の異なる素材に足裏で触れたりして感覚を取り戻していく。感覚の蘇った足裏が、踵でトントンと床に話しかけ、つま先立ちでトコトコと移動しながら歌い、足の親指で曲線を描いて床をなでるともう地面と足の対話をはじめまる。右足左足と規則的に踏み出す日頃の歩きのパターンから解放された足は、さまざまステップを踏んで踊りだすのだ。まさに私が授業をとおして取り戻そうとした地面と対話する足が、ジャングルの闇の中に登場した現地の人たちの足であり、その足が彼らの生活のなかで活かされているということに私は深く感動した。

そして今回は仙台で再び山極氏のお話をうかがう機会に恵まれた。それ以来、私は考え続けている。人と人が、あるいは人が世界とどのようにして繋がっていくのが望ましいのだろうか。



今回の講座の映像記録で観たゴリラたちの姿を思い出す。

・ジャングルの案内人の横に腰をおろして、その彼と目を合わせようとするゴリラの行動

・横たわったまま動かない父親のからだの上で動き回って遊ぶゴリラの子どもたち

・緊張状態にある2匹のオスの間に入って、その場の空気を変えてしまうメスの振る舞い

・移動の際に振り返って、怪我をした子ども様子をみる親ゴリラ
そして山極氏は、ゴリラはお互いを傷つけ戦うことはしないと宣言された。

ゴリラの世界には言葉がない。それゆえにお互いの様子を察し合い行動するという命を守り育む非言語の世界が広がっているのだろうか。

私たちは言葉を獲得し言葉を使いこなし、言葉や数字が重視される社会に身を置いて生活している。そしていつの間にか、背中をまらめて小さなパソコンやスマホの画面を覗きこみ、文字を指先で打ち込んで他者と交信し、バーチャルな世界にのめり込み多くの時間を費やすようになってしまった。私たち現代人の非言語の世界は今どのようになっているのだろうか。

私が勤めていた大学の周辺には、森が広がっていた。私は表現の授業の一環として、五感のアンテナを伸ばす森での授業に取り組んできた。

学生たちは、2人組になりその内のひとりが、目を閉じたパートナーによりそって、森を案内する。森の中を歩きながら、パートナーに触れさせたいものや聴かせたい音、見せたいものをみつける。例えば、芽の伸びはじめたどんぐりをみつけてパートナーの手のひらにのせて触ってもらったり、太い木の幹の近くまで連れていき、ゴツゴツした幹に触れてもらったり、頭を近づけて香りを嗅いでもらったりする。枯れ葉を手で揉んで葉っぱがすれる音を聞かせたり、真っ赤な実をみつけてパートナーの目の前に持っていく、手を叩く合図で一瞬目を開けて見てもらったりもするのだ。一旦森に入ると、一切言葉は交わさないようにした。時には、はだしになって陽たまり

の土の上を歩いたりもした。森の空気を吸って、森に差し込む日の光や木々の影の明暗を閉じた瞼に感じる。その都度、学生たちいろいろな発見があった。森での授業は90分に納めるのが大変だった。しかしいつの頃から小さな虫が飛んでくるだけで大騒ぎになり、うまく寄り添って歩けない学生の姿が気になりはじめた。そしてパートナーに何を見せてあげればいいのか、聴かせてあげればいいのかかわからない、触れさせてあげたいものが見つからないといって、森を素通りして早々に戻ってきてしまうペアが増えていった。

この授業をはじめた30年程前は、のんびりと大きな空気が社会や大学にも漂っていた。そして、その頃は固定電話の時代でもあった。この間、社会から寛容さが消え、ITの技術が目まぐるしく発展していった。これらの社会の変化と

学生たちの森での授業の取り組みの様子の変化とは、密接に関係しているのではないかと私には思える。

激しい社会の目から逃れて、刺激的なバーチャルな世界にのめり込んでしまうと、現実の世界や自然が色あせて見え興味が持たなくなってしまうのだろうか。

いいえ！ 現実の世界は、そんな退屈なものではないはず！

ジャングルの闇の中に光る苔が存在するように、私たちが目を見張るようなものやワクワクする出来事との出会いが持っているはず……そう考えてはみるが。

本稿の執筆中に新型コロナウイルスの感染拡大のニュースが世界中で報じられるようになった。生身のからだで人が他者や世界と関わるができますます困難になり、そのことをカバーするためにITの技術の活用が加速するように思われる。しかしこのような流れに安易にのってしまっているのだろうか。

私たちは今、あのゴリラたちのように他者からだとところを開き、世界に全身で働きかけて五感でつながりながら経験を積んでいくという生き方について、少し立ち止まって真剣に考えなければな



らないのではないだろうか。ITの世界に片脚を突っ込みながらも。

（元宮教大教授）

言語以前の

コミュニケーション

本川 良

京都大学総長、山極寿一さんのお話を拝聴できる機会を得ました。本当に運が良かったです。テーマは「サル化する人間社会」ゴリラから学ぶこと」

はじめから最後まで、本当に興味深く、わくわくした時間になりました。同時に、もともと知りたくなかったし考えたりしました。頭の中でいろんなことがぐるぐる回っている、そんな状態です。

■ゴリラにある「社会」「家族」「共同体」

「言葉以前に社会はできていたはず。」ということ。つまり、社会ができてから言語が生まれた、と言えそうです。そして、人類が言語を使うようになった理由には、人類特有の「家族」という社会単位が大きく関係しているのではないかとのこと。

ゴリラのコミュニケーションの取り方の特徴は「挨拶」。じつと顔を合わせて見つめ合うとのこと。これはサルではできないことらしい。喧嘩になるから。

ゴリラがサルと異なり、相手の気持ちを感じたりメッセージを受け取ったりできるのは、そうやって見つめ合ったり、食べ物分け合つて共に食べたり、子育てを集団で協同して行つたりしながらお互いの一体感を確かめ合つてきた、そんな長い時間をかけて身に付けた感覚、共感できる土台みたいなものがあるからなんだろうと思います。

身体感覚をベースにしたコミュニケーションを繰り返してきた歴

史が、共同体においてお互いの信頼感を高めることにつながつてきた。それがゴリラの生活から見取れるような気がしました。言語がなくても身体感覚でコミュニケーションは十分にできるもの。いや、むしろそもそもコミュニケーションとはそういうものだった、と伝えられているように感じます。

■コミュニケーションを考える

「言葉によつて意味が付与された」「コミュニケーションはそれまでは気持ちを伝えるものであった」山極さんはそうおっしゃったと思います。そしてその言葉によるコミュニケーションのルーツは「子守唄」だと。集団で共同的に子育てをする中で、赤ん坊に安心感を与えるための音声によるメッセージ、コミュニケーションが音楽だったということでした。コミュニケーションは気持ちを伝えるもの、安心感を伝えるもの。そして共感能力を高めるものということだという話。そして今は情報があふれている時代。世界中の人に多くのことを伝えるには、もちろん言語が必要。今は身近であっても文書で残すとか、きちんと説明するとか、話し合うとか、多くの場合、言語を通してコミュニケーションを図ることが圧倒的に多いし、優先されることも多い気がします。

「情報伝達・共有」「コミュニケーション」と言う場合、まず頭に浮かぶのはそういう言語を通じたコミュニケーションです。少なくとも私の場合はそうだったなあ、と感じます。いつの間にか「コミュニケーション」を当たり前のように「言語優位」で捉えている自分がいます。

しかし、言語的なことを「コミュニケーション」と考えてはいても、実は本質的な部分は身体感覚に頼っていることにも気が付くことができます。例えば声色、表情、それ以外の他者の体に表れる微細な変化。そんなところから、他者の心情や真意をはかることが多いものです。

説明すれば分かる、書けば分かる、対話すれば分かり合える、で



はありません。それだけではコミュニケーションは成立しないし、進展もしないんだなあ。言語ですら「共感」という点から見れば、バーチャルな世界なのですね。

「安全は技術で作れても、安心はつくれない。安心は人の中にある」ということ。リアルな、自分の感覚を大事にしたコミュニケーション。情報化社会とか、テクノロジードとか、そういうのも便利などころがあるけれど、根本的な「人間としての感覚」にもっと目を向けようと感じた機会になりました。

言語以前のコミュニケーション。ここが今回とっても気になったところです。

(雄勝小)

公開授業を振り返って

春日辰夫

センター主催「高校生公開授業」が、過日の山極寿一さんの「サル化する人間社会―ゴリラから学ぶこと」で10回目になるという。スタート時に関係していた者として感慨が深い。

この企画についての願いは大きく二つあった。

その一つは、高校生に、卒業までに一度でも、一流の専門家・研究者の授業を受けさせたいという余計なおせっかひ的願いだっただ。多くの学校は教科書に忠実な授業であろう、加えて、大学入試のための学びがさらにタガをはめているであろうことを想像すると、一度でもいい、ふだんの「学び」と違った学びの場をセンターで作り、参加高校生に、これまでにもつことがなかったであろう学びの世界に一度だけでも入れてやりたいものだとの思いをもった。

その願いに関わる教室の思い出がある。在職時、「今の勉強は、なんかおもしろくない。別に、先生の教え方がわるいとかじゃなくて、6年の3学期っていうのは、5年の勉強とか、6年の1学期2学期

の復習。復習も大事だけど、もつと新しいのがやりたいなあと思う。く。M男」という日記を受けた。読んだ私は、他の子どもたちもM男と同じ願いをもっているに違いないことを思い、卒業というのに、彼らに応え得ていない自分を非常に情けなく思ったことである。

もう一つの願いは、この授業を高校生たちのものだけにせず、公開にして多くの教師に参観してもらいたい。その場がそれぞれの今の今とこれからを考える時になるならばと思ったこと。

この願いに関しても思い出がある。全国教研沖繩集會に参加したときのこと。事前に、林竹二さんとお会いしたおり、「同時期に自分も沖繩に行くが閉集會の講演を聴きたい」とのこと、ご一緒したことがあった。約束の場所でお会いするなり、『開国』についての新しい資料が見つかったので今度は前よりもいい授業ができそうだ」と満面に笑みを浮かべて言った林さんの顔だ。

授業のための新しい資料を見つけ、満面の笑みを仲間に見せるなどまっただくなかった私だが、林さんのような笑みをもつ教師と出会いたい、多くの仲間とそんな場を共にしたいと思いつづけた。

こんな願いで始めた「高校生公開授業」だったが、最初の頃は高校生の反応がほとんどない。所員の清岡さんは、昼休みや夕方方の時間帯に県内高校に電話をかけたまわったり、センター会員の高校の先生方から直接声をかけていただきながら、公開授業をなんとか成立させつづけた。その10回目の今回は、これまでの地道な取り組みが実ってきたのか、参加者のほとんどは高校生自らの直接の申し込みだったという。また、40名弱の生徒と同数以上の参観者で、東北大学の教室はあふれた。

当日の授業は、山極さんの「最初に、私の師匠のそのまた師匠の今西錦司の話をします。」から始まった。以前から今西さんの霊長類学などに興味をもっていた私には、冒頭からの「今西」に身を乗り出さずにはおれなかった。

今西さんは「類人猿の社会の研究は人間社会の由



来を知るために必要である」(『人間社会の形成』1966年)と言っている。また、桑原武夫さんがエッセーで、「カーペンター博士が来たとき、博士は今西グループの仕事を最高に評価したが、自分たちアメリカの学者は、霊長類の研究で、論理を通して推論することでは、率直のところ、日本人にけつして劣るとは思わない。しかし、今西や伊谷の示すあの洗練された微妙な発想は、これはおどろくばかりだ。どうしてそうなのか、日本人全体の性質か、それとも今西、伊谷などという個人のパーソナリティーの問題だろうか。くく」と書いていると、開高健は『人とこの世界』(2009年)の中で紹介している。

当日の山極さんの授業はカーペンター博士の言うお二人の業績を継いだ、弟子の山極さんが博士の知りたがっていたことをご自分の具体的調査研究で高校生に解いてくださったように思い、私には大いに満足した時間になった。

授業後の高校生の感想を読ませてもらった。どれも書かずにはおれず書いたと読める内容だった。

●教育時評

35人学級実現の道

渡辺 孝之

1月25・26日、宮教組は「ゆとりある教育を求め全国の教育条件を調べる会」(以下「調べる会」)の皆さんをお招きして、「子どもと学校にゆとりを求める学習交流集会」を開催した。

「くぐりラのように、生き物の生態を調べることで他のものと関連させ、新たな発見ができることにとってもおもしろさを感じた。くく」(Hさん)

「くぐりラのように他の動物と共生すること(人間でいえば、他の国々の人々、周りの人々を受け入れて、共に共生していくこと)を、現在起きている紛争なども少しずつ減らしていけるのではないかと考えた。ゴリラは凶暴な動物ではなく、人間の未来の姿をしめしてくれている、人間が学ぶべき動物だった。くく」(Aさん)

「くく知識のある方の授業は、貴重だと思うので、今後も、こういった機会があれば、積極的に参加していきたいと思いました。」(Mさん)

紙数の関係で残念ながら3人だけの、しかも、その一部だけという乱暴な紹介になったが、それでも、参加高校生に残した思いが小さくないと推察できると思う。

二回目に入る20年度以降の企画者側の創意に対する私の期待はますますふくらんでいる。(元教員)

本稿では、学習交流集会での学習をもとにどうすれば35人学級を実現できるのかを提起する。宮城の実態を明らかにしようとするのだが、具体的な数字については今後精査が必要であることをお断りする。

35人学級の実現は教育条件整備の要求の第1位に位置付く。国は義務標準法で学級編制基準を小学校1年生で35人としたほかは中学校まで40人としている。各

自治体ではこの編制基準を独自に引き下げ少人数学級を実施している。宮城県では、小学校2年生と中学校1年生を「学級編制弾力化事業」で35人学級としている。仙台市はさらに中学校3学年を35人学級とした。東北各県は様々な形で少人数学級を導入している。宮城県は東北の中で最も遅れている。

宮教組でも毎年教育長交渉のトップ項目で35人学級実施を要

求し、民主教育をすすめる宮城の会でも県民署名を添え県議会に要請している。要求に対し、教育長は「義務標準法に基づいて実施している。定数改善は国の責任」との回答を繰り返す。知事部局への要請では「財政不足」と回答した担当者に、同席した方が「山形はお金があるからやっているのではない。知事の姿勢の問題だ」と痛烈に批判したこともあった。では、どのようにしたら宮城

県でも35人学級は実現するのか。宮城県の小学校（2019年仙台市を除く）で試算してみた。まず、小2の弾力化事業で29学級が増えている。【表1】3年生以上で「38人学級」をまず導入しようとするれば41学級増（ア）になる。35人学級ならさらに61学級増（イ）が必要だ。ちなみに複式基準を16名から14名に引き下げると3学級増（ウ）になる。合計105学級増（エ）だ。105名の担任教員増が必要になる。

そんな数は県独自には無理！……ではない。多くの県では、加配定数を活用している。小2の29学級も加配定数で教員を配置している。加配定数には様々な種類があり、2019年度は総数585名が加配されている。このうち、少人数指導などのための「指導法工夫改善加配」として104名を各校に配置している。これに1名上乘せすれば宮城でも小学校全学年で35人学級を実施することが可能だ。

ただし、これは「安上がりの35人学級」ではない。学級担任でない「指導法工夫改善」加配教員をすべて担任に回せば、たちまち学校は息詰まる。個別の指導も専科の授業も補欠授業も成立

しない。教員の多忙化にさらに拍車がかかる。学級増分だけの教員増では不十分だ。教員の配置基準では学級数に対し教員数は上乘せして配置されている。小学校でいえば6学級以上で1名、15学級以上で2名の担任外の教員が配置されている。【表2】この方式に基づけば、104学級増に対して121名（オ）教員増が必要になる。104名の加配数を大きく上回ることから一気にできるかは議論が必要である。（安上がりにするために臨時教員増で対応するケースもある。）

さらにもう一方で検討すべきことは、義務標準法に基づく定数がきちんと配置されているかという点である。義務標準法では、県全体の教員数を学級数に応じた小数第3位までの定数をかけて総数を求めている。【表3】標準法に基づく学級数に応じた教員配置基準が国と宮城県では異なっている。例えば国基準では11学級から担任外2名配置になる（カ）が、宮城県は前述の通り15学級から2名配置で差がある。さらに、宮城県の教員配置基準の学級数には特別支援学級を含まない。通常学級数をもとに教員配置数を算出し、特別支援学級分の担

任教員数を足している（キ）。こうすることで、義務標準法で国から示された定数に対して「浮き数」が生じている。この「浮き数」も35人学級に活用できる。この全貌については引き続き検討したい。

35人学級実現のために大切なことは、できない理由を探すのではなく、どうやればできるのか知恵を出し合い、合意をすることである。それが、複雑多様な子どもたちの成長発達の要求に応える道であり、ブラックと呼ばれる学校の勤務実態を改善し教員の健康と希望を保障する道の第1歩だ。

（宮城県教職員組合 執行委員長

【表1】 少人数学級数

少人数学級	3年生以上を38人以下（ア）	3年生以下を更に35人以下（イ）	複式学級を14人以下（ウ）	学級増合計（エ） （弾力化事業29学級含む）
学級数	41	61	3	105（134）

【表2】 134学級増に必要な教員数

現行担任教員数 （教頭除く）	県基準で算出	特別支援学級別で算出 （弾力化除く）（オ）
3113人	3320人	3263人
	207人増	150人増（121人増）

【表3】 学級編制国基準と県基準との差（現行は特別支援学級別で算出されている）

現行担任教員数 （教頭除く）	国基準で算出（カ）	県基準で算出（キ）
3113人	3475人（-98人）	3423人（-46人）

私の出会った子どもたち

子どもが笑顔になる教室

中野典子

仕事を辞めてから9年が経ちますが、今でも時折ふと思い出す子どもたちがいます。その一人がこう君。1年生、2年生と受け持った子です。

こう君には障害があり、学級集団の中でみんなと一緒に学ぶのが危ぶまれていました。こう君は授業中、できないことがあると、教科書などを机に叩きつけて大声でわめいたり、手足をばたばたさせて暴れたりすることもありました。休み時間に校門から飛び出そうとしてパニックを起こすこともありました。私は、こう君の背中をトントンしたり、脇を抱えたりしながら授業をすることもありました。飛び出したこう君を肩に担いで連れ帰ることもありました。

1年生で、ひらがなの勉強をしていた時のこと。『あ・い・う・え・お』までは、記号のような形を書いていたのですが、自分の名前の『お』では違いました。「いっしょに書いて」と言っただけは私といっしょに、途中からは一人で、丁寧に書いていました。母音の勉強の次は一筆で書くことができる文字をしたのですが、『へ』の勉強をすると知った時の、「なあんだ、かんたんじゃん」と言っただけ、飛び出したこう君を肩に担いで連れ帰ることもありました。

やはり1年生で『繰り上がりのある足し算』の勉強をした時のこと。『7+6』のやり方を、ゆいちゃんがタイルを使いながら話しました。「5と5で10。2と1を足して3。だから答えは13」。それを聞いたこう君が「わかった!」と言ったのです。それまで、算数は苦手。とくに引き算は難しいと言っていたこう君ですから、ここで足し算も引き算も一気に分かったことがよほどうれしかったのでしょう。2年の間には、この他にも本当にいろいろなことがありました。2年生の終わりに、こう君は、「ぼくは本をすらすらよめる

ようになりました。ぼくはじぶんですごなおもいました」と書きました。

そんなこう君のことを思い出しながら、思うのです。子どもたちは、遅い早いの違いはあるかも知れないけれど、一人ひとりが伸びる可能性を秘めているのだと。そして、一つ一つの教材が子どもたちに働きかけ、子どもたちを育ててくれるのだと。いろいろな子どもたちがいるけれど、学校は楽しいところ、でも、みんなと一緒にだともっと楽しくなるということ、授業を通して感じてほしいと思います。

(元教員)

シーちゃんとのこと

佐藤正夫

さほどの経験もない教員6年目に1年生を受け持つことになりました。わたしにとつて40人以上の1年生は、宇宙人の集団にしか見えませんでした。その中に、シーちゃんは表情の変化をほとんど見せることなく過ごしていました。場面緘黙的なところがあり、学校では声を出すことはありませんでした。自分の名前の読み書きもできませんでした。境界線児ということで引き継ぎを受けました。シーちゃんには、子どもたちのプリント配りをよくさせました。同じ学級の子どもたちの名前と顔を覚えてほしいと思っただけです。他の子どもたちは特にいじめたりすることはありませんでしたが、あるとき、練習し終わった算数のプリントを集めていた男の子が、シーちゃんのそばで「あっ!こいつ0点だ!」と大声で言いました。すかさずわたしは、「ばかたれ!そんなこと言うな!」と叱ったのですが、何せやんちゃな1年坊主、思ったことは言わずにおれないのです。そんなことがあるたびに、何とか一問くらいできるようにしてやらねばとあせるばかりでした。



私の出会った子どもたち

ある日、授業をしていると、教室後ろの入り口から見たことのないお母さんと3、4歳ぐらいの男の子がすうつと入ってきて、子どもらの間をふらふらと歩き始めたのです。何だ？誰だ？瞬間的に、「どなたですか？」とか「何か用ですか？」という対話が成り立たない感じだったので、子どもたちを動揺させないように、「あ、どうも、散歩に来たんですね。ゆっくり見ていっていいですよ。」と声をかけ、授業を続けました。後で分かるのですが、シーちゃんのお母さんと弟だったのです。家庭訪問前だったので、わたしが知らないだけでした。その次に来たのは給食時だったので、「一緒に食べませんか？」と子どもらと食べたこともありました。そんな出来事から、シーちゃんの事情が少し見えたりしました。ますます責任重大だと思えました。

でも、学習面の積み上げがさほどできずに2年生に持ち上がりました。何か嫌なことがあるとトイレにももって出てこないことも結構ありました。わたしは常に目の片隅に置いておくようにしたのですが、ある意味どの子も目を離せないもので、気持ちをくみ取ってあげられなかった方が多かつたのだと思います。

秋にお話教材「名前を見てみよう」の勉強をしました。最後に「面白かったところを絵にしてみよう」と投げかけ、四つ切り画用紙に絵を描かせました。そのときわたしは、シーちゃんの絵に立ち止まることになりました。大男がえつちちゃんの迫力に圧倒されてしぼんでいく場面でした。教科書の挿絵は小さくなつてしまつたどじょうのような絵があるだけです。シーちゃんの画面には、三通りの大男が描かれていました。えつちちゃんと向かい合う大男、半分ぐらいになつた大男、ちっちゃくなつた大男、それがふにゃふにゃしながら縦に並んでいました。「しぼんで、しぼんで、しぼんで」という言葉からイメージした大男を連続した動きで表現したのです。しゃべらない、文字もうまく使ひこなせない、友だちとも関われない、それでも、お話をこんなに映像化して楽しんでいたのかと驚きました。この子の内面を初めて見たように感じ、跳び上がるほどうれしくなりました。

実は、5、6年もわたしが担任でした。あれ以来すばらしく成長したと書きたいのですが、なかなかそういう事実を見つけることが

できませんでした。でもあのときの発見がわたしを「信じて待つのだ」と構えさせたように思います。わたしは用事がなくとも折あるごとに話しかけるようになりました。返事は返ってきません。黙って二人で外を眺めるだけの日もありました。

いよいよ卒業が近づき、最後の取り組みとして自画像を彫塑で製作させました。子どもらには「笑い顔など表情を付けるように」と要求しました。どの子も表情を作りながら、粘土で立体に仕上げる彫塑の面白さに夢中になりました。でも、シーちゃんだけは私の要求を受け入れず、にこりともしない自分の頭像を作つたのです。完成した全員の頭像をロッカーに並べたとき、やはりシーちゃんのは異質な感じがしました。要求を拒否したというより、それが精一杯だったのだろうとそのときは思いました。しかし、授業をしながら目に入ってくる作品群を見ているうちに、シーちゃんの作品が語りかけてくるような感じに見えてきました。決して表情豊かではないけれど、何かがそこに込められているように思えました。改めて、わたしは彫塑で何をさせたかつたんだろうと考えるようになっていきました。できればはっきり目に目が行つて、自分の頭像を作りながら自分と向き合うことの意味がすつぱり抜けていたと気づきました。シーちゃんは、この頭像を通してわたしの授業の未熟さを教えてくれたのです。それが分かつたとき、この子の育ちは間違いなく6年間の中にあつたのだと思えました。

ちょうどその頃、中学校の進学先の問題が浮上していました。お母さんは特別支援学級に行かせたいようでしたが、わたしにはそう思えませんでした。そこで、本人の意向を優先させるために、中学校の特別支援学級を参観しに行きました。すると、そのときばかりは、はつきりと「いやだ」という返事でした。お母さんには、本人の意思とわたしの考えを伝えた承してもらいました。

迷いもあつたその選択が、正しいと分かつたのは2年後でした。シーちゃんから手紙が届いたので。驚くべきことが2つありました。あんなに書けなかつた漢字がひらがなよりも多く使われていたのです。また、中学校生活が生き生きと書かれていました。えっ！何でこんなに変わったの？何があつたの？うれしさいっぱいで読みました。



私の出会った子どもたち

「どんな子にも可能性が詰まっている」教師なりたての頃から何度も耳にした言葉でした。でも、わたしにとって、どこか観念的なひびきがありました。わたしはシーちゃんと出会うことで、それは本当のことだったんだと思うようになりました。彼女は中学卒業後、服飾関係の学校に進学しました。

(元教員)

生きてくれている だけで幸せ

高橋 三代

私が教員になって8年目に担任した4年生、今から30年前のことだ。K君が書いた「こんぎつね」の授業の感想を読んだときの驚きと感動を今も忘れられない。

仙台市の中心地の南東部。地下鉄の駅から近く、JR東日本やN.T.Tの官舎がある団地の中にある学校だった。専業主婦が多く、同じような家庭環境の児童が集まっていた。両親がいて、父親は社会の中で約束された仕事があり、生活に困らない収入がある。今思うと、なんて恵まれた環境の中に育っていたのだろうと思う。多忙化極まりない今では考えられないが、その学校は、毎年学校文集を学年毎で作っていた。一人2ページ、手書きの作品を全員分載せた。学年毎に原稿用紙も作っていた。表紙の印刷、編集など、担任は大変な仕事だったと思うが「書く」「読む」という言語活動の基本を大事に思う教員の集まりだった。

教室にいるK君は、授業中は物静かで落ち着いた感じの男の子だった。休み時間は友達と楽しそうに談笑したり、放課後は団地の中の公園を友達と駆け回ったりしていた。

私は「こんぎつね」の授業の終わりに、その日の学習の感想を書かせていた。母を亡くした兵十が赤い井戸のところで麦をといでい

る場面。K君はその日も発言は少なく、印象に残っている発言はなかったような気がする。授業後の感想には次のようなことが書かれていた。

「兵十だって、病気の母のご飯を作り、洗濯や下の世話もして大変だったにちがいない。それでも大事な母親を失うことは、残された兵十の生きる気力も無くしてしまうことを『赤い井戸のそばで兵十がまた、麦をといでいる』でわかった。こんがいわし売りの車からいわしを盗んで兵十の家へ投げ込んで穴へもどる坂道から見た兵十は、まだ麦をといでいるのだ。動けなくても、寝たきりでも母親が生きていてくれるだけで、兵十に生きる気力を持たせてくれた。だから、兵十は冷たい川の中に入って病気の母のためにうなぎを捕っていたのだ。生きてくれているだけで幸せなのだと思った」

この感想を読んだ直後、40歳代の息子が病気で寝たぎりの老いた母を見捨てて置き去りしてしまった事件があった。その息子は目の前の母の世話をする事から逃げ出して、母の年金を受け取って生活していた。母親を失って、初めて大きな喪失感を味わったにちがいない。介護の大変さは今も大きな問題だ。家庭で介護すべきだということではない。4年生のK君は「こんぎつね」を丁寧に読む中で生きることの意味を想像した。「こんぎつね」を読んで、やってあげられることは全てやる兵十の姿、母親を亡くした後、時を忘れたように麦をといでいる兵十の姿に想像を働かしたのだ。私の想像をはるかに越えたK君の深い読みが驚き、素晴らしいなあと尊敬した。次の授業に入る前に感想を読み合ったとき、友達からも驚きの声が上がったのを覚えている。母を捨てた息子より、4年生のK君の方が人として真つ当だと思った。私は、K君が大人になったときの世の中を想像して、明るい希望を感じた記憶がある。

今、どうだろう。私の母は認知症になり介護施設にいる。大変なことは施設の人が手伝ってくれる。でも、どこにいても、やってあげられることは全てやってあげたい。K君の感想を思い出すたびに、生きてくれているだけでありがたく、幸せな気持ちになる。

(元教員)



未来へのトライ

近藤 彩 香

「先生、学校にはリフジン（理不尽）バスが走っているよ」ある日突然、クラスの子どもに言われた言葉だ。何だこの子は、という衝撃と同時にうれしさがこみあげてきたのを覚えている。

私が担任する5年生の子どもたちの第一印象は、みんなと一緒が大好きで、私の言うことには何も疑問を持たない「良い子」たち。私が話しているときも、良い姿勢でじっと聞いてくれる。すばらしい！と思うのだが、どこか疑問が残る。じっと聞いているというよりは、聞いているように見える子どもたちだったように思う。人前で自分を表現することが苦手。大きな問題は起こらないのだが、どこかもどかしい。そんな思いを抱えていたときの、「リフジンバス」発言だ。そうそうこれだよ。私は心の中でわくわくしていた。「良い子」に見える子どもたちだっでどこか生きづらさを抱えている。いろんな思いを持って生活している。やっぱり子どもものの感性は面白いと思える出来事だった。

今年度担任した子どもたちとの一番の思い出は、学習発表会である。昨年度の5年生とは朗読劇「いわたくんちのおばあちゃん」を一緒につくり上げた。広島に落とされた原子爆弾を基

にしたお話で、平和学習を行いながら発表した。昨年度の発表を通して私が感じたのは、子どもたちの伝える力は素晴らしいということである。そして、学びが素直に表れること。次の学習へとつながることである。今年度も5年生の担任。また、みんなで一緒に思いを伝えたいと私は台本作りを始めた。今年のテーマは東日本大震災に関する内容でいこうと学年で話し合っていた。子どもたちは、仙台市教育委員会のプログラムで震災遺構である荒浜小学校への見学が決まっていたことと、見学で終わりではなく、更に学びを深め、地域の人たちに発信しようと考えてのテーマ設定だった。

東日本大震災から9年。あの時、私はまだ学生だった。福島県の出身で青森の大学に通っていた私は、当時、仙台市をはじめとする宮城県がどのような状況だったのかをほとんど知らない。ましてや、学校現場で先生たちがどのように対応し、向き合ってきたのかという知識がまるでなかった。このままでは、台本が作れない。子どもたちに何も語ってあげることができない。私は、様々な組合の先輩方に相談し情報を集めた。「こんな学習会があるから行ってみたら？」「ここに行けばこんな人の話が聞けるよ」「この

本を読んでみたらいいかも」たくさんの先輩方が協力してくれた。こんな時、改めて組合の良さを実感する。エネルギー溢れる先輩方の姿に圧倒される。そして、たくさん元気をもらえるのだ。

震災の記憶をたどり、防災・減災学習を進めていく中で、講師の方や私がする話を真剣に受け止めてくれていた子どもたちであったが、荒浜小学校への見学は彼らにとって、より実感を伴った学びになった。学校に近づくにつれて変わっていく風景。バスの中の雰囲気も少しずつ変わっていった。友達との会話も少なくなった。バスを降りて、目の前に立つ校舎を見上げた。たくさんの展示品に言葉を奪われていた子どもたち。案内をしてくれる人が先に進んでも、その場に残り、じっと見つめていた。小走りですいていくのだが、また別の展示に目がとまり、動

けなくなる。この繰り返しであった。私が教室で語っていたときとは違う目をしていった。見なきゃいけないから見ているのではない。聞かなきゃいけないから聞いているのではない。これまで、どこか受け身だった彼らが、もっと知りたい。もっと聞きたいと前のめりになっていく姿に私は感動していた。本物の展示物が与える力はやはりすごかった。帰りのバスでも、



見学した時の話で持ち切りだった。感じたこと、思ったこと、そしてもっと知りたいこと。伝えたいという気持ちがあれば自然と子どもたちは対話をするのだなと改めて思った。この見学を通して学んだことは、写真と共に発表の台本に盛り込んだ。子どもたちの感想をそのまま台詞として使ったが、どれも教室の学びでは出てこなかったものばかりであった。

* * *

台本を作り進めていくにつれて、学年で話題になったことがある。今年で11歳になる彼らは、震災当時わずか2歳。2歳の幼い子どもたちを抱えていた保護者の方には、どれほどの不安があったのか。どんな思いで震災を乗り越えてきたのか。当時の記憶を聞いてみたいと思った。保護者の方に協力を呼び掛けると数々の思いが寄せられた。避難所で生活したこと。食料を手に入れるために苦労したこと。おむつを買うために並んだこと。どの家族にも、その家族にしか語れないエピソードがたくさんあった。しかし、どのエピソードからも共通して感じ取れたものがあった。それは、家族、そして我が子への愛だった。私は改めて、子どもの存在の大切さを実感した。その存在に励まされ、子どもたちが生きる希望になっていたことが感じ取れた。震災のつらく悲しい記憶を振り返ることは大切である。しかし、もっと重要なのは、君たちは誰かに愛され守られている存在なのだというメッセージを子どもたちに贈ることだと、保護者の方の協力によって気付かされた。発表の中では、全てのエピソードに触れることはできなかったが、当時の記憶がほとんどない彼らにとって、家族からの体験談ほど震災をより身近なものとして捉えることのできた資料はなかったよ

うに思う。

* * *

台本を作るにあたって、発表のゴールは前向きなメッセージにしたいという思いがずっとあった。私が集めた資料には、震災の恐ろしさを訴えるものが多くあった。目をそらしたくなる写真や映像。想像を絶するような当時の記憶や証言。時には、怒りがこみ上げてくることもあった。それでも、これから生きていく彼らが発表の主役だからこそ、発表を見る人たちが明るい未来を想像できるものにしたかった。そんな時、私の心が大きく揺さぶられたものがあつた。それは、岩手県釜石市で作られた「海ようろノサイドだ。わたしたちは未来だ」という映像資料である。2019年はラグビーW杯で日本中が盛り上がった。ラグビーというスポーツのルールを全く知らない私も、数日間でわかファンになってしまった。釜石市はラグビーのまちである。震災からの復興とラグビー精神を結び付けて作られた映像。短い言葉からも伝わる釜石の人たちの熱い思い。震災のつらく悲しい記憶を伝えるだけでなく、未来への希望が感じられるものだった。釜石市の子どもたちは、東日本大震災で「釜石の奇跡」を起こしている。これは以前から私も知っていたことだったが、小中学校の跡地に建っているのが「鶴住居復興スタジアム」であることをこの時初めて知った。W杯が開催された他のスタジアムと比較すると決して大きいとは言えないスタジアムだが、たくさんの方の思いが詰まっている場所なのだと感じた。そこに、世界中のラグビーファンが集れからの未来をつくっていくのは君たちなのだ」と、私は、台本を通して子どもたちにメッセージ

ジを送ろうと思った。

発表のラストはこのような言葉でまとめた。

ラグビー日本代表が起こした奇跡

釜石の小中学生が起こした奇跡

これは、奇跡なんかではないと思います。

過去の教訓の伝承、学び、そして実践

想定外を乗り越えるための備えがあつたからこそ起きた必然だつたと思います。

私たちは、一瞬にして奪われてしまった未来があつたことを受け止め、学び、そして伝えていかなければなりません。

東日本大震災で生かされたほくらが、未来をつくらなければなりません。

ぼくたちは未来だ

今度は、私たちの大切な人たちを守っていかなければなりません。

ぼくたちはワンチーム

後ろにいる仲間を信じてパスを出そう

これからがぼくらの挑戦だ。いくぞ。

未来へのトライ！

* * *

学習発表会当日。5年生の発表が終わるとたくさんの方が声を掛けてくれた。「先生。すごく良かったよ」「先生。ありがとうね」こんなに直接感想をもらったことはなかった。子どもたちのメッセージが見ている人に伝わったのだなとうれしさがこみ上げた。「ぼくのおばあちゃんは釜石に住んでるんだ。本番は、わざわざ見に来てくれたんだよ。頑張ったねってほめてもらっ

た」と教えてくれた子がいた。アメリカに転勤が決まっていた家族のお母さんは「先生、私たちも未来へのトライしてきます」と言って旅立ってくれた。自分たちは大切にされている。たくさんの人に守られている。この思いを、子どもたちの言葉を通して地域に発信できたことに意味があったのではないかと感じた。学習発表会後も、「こんな新聞記事見つけました!」と震災関連の資料を持ってきてくれる子がいたり、「また、荒浜小学校に行ってきたよ」と報告してくれる子がいたり、学びのつながりを感じることができた。そして、学習発表会に向けて、私に台本を作るというチャンスくれた学年の先生方にも感謝しなければならぬと思っている。

学習発表会では、112名全員が一人一台詞を担当した。人前で自分を表現することが苦手だった子たちが、この経験を機に皮むけたように思った。台詞練習の過程で、恥ずかしい思いをしたり、緊張したり、指導されて不安に思ったり、悔しかったり。様々な経験をを経て、自信を付けたようだった。臆することなく挑戦する子も増えてきていた。私自身の4月に感じた彼らの印象、どこかもしかしい思いに変化が出てきていた。

* * *

私に「リフジンバス」発言を面白いと認められたことで、自由な発想でたくさん意見を投げかけるようになったあの子とは、1年間でたくさん面白い話をした。ある日、「先生はいつも哲学的なんだよね」と、少し怒った表情で、言われたその言葉も私は嬉しかった。ただ、他の先生の授業では、自由な発言が許されなかったように何度か怒られて落ち込んでいた様子も見えた。そんな姿を見るたびに、私自身の子どもと

の関わり方を自問自答する1年間でもあった。「良い子」とはどんな子だろうか。誰にとつての「良い子」なのだろうか。少なくとも私にとって「リフジンバス」の子はとても魅力的な「良い子」だったのにな……と。

* * *

2月、来年度から学校に持つてくるものが細かく決められることを子どもたちに伝えなければならなかった。表立って名前は付いていないが、学校スタンダードと呼ばれるものである。どう子どもたちに伝えようかと、とりあえず説明を始めてはみたが、すぐには納得しなかった。まあそうだろうと予想していた。だってリフジンな点がいっぱいあったから。そうだよ。リフジンだよ。と思いつつ、私は最終的に無理矢理納得させてしまった。彼らの「なぜ?」にとことん向き合えなかった。それは、このスタンダードを決める会議で何も意見を言わなかった自分への後ろめたさからくるものだったように思う。自分がまだまだ無力であることを実感した。子どもの前で理想を語るくせに、自分は職員室で何をしていたのかと。

そんな中、子どもたちとの別れは突然やってきた。2月28日、新型コロナウイルス拡大による臨時休業が決まる。来年度は担任できない。卒業は見届けられないと思っていたからこそ、3月にかかる思いは強かった。「大造じいさんとがん」を一緒にやっていた。クラス対抗全員リレーで優勝したかったな。6年生を送る会成功させてあげたかったな。卒業式で、6年生の姿を目に焼き付けてほしかったな。思いはいくらでもあふれてくるが、怒りの矛先だけは間違えないようにしたい。最後の日、彼らはたくさんさんのメッセージを黒板に残していつてくれた。

前向きなメッセージが並んでいたことに安心した。さようならと帰っていく彼らの背中を見ながら、きつと大丈夫だと自分に言い聞かせた。

この春、私は新たな挑戦をさせてもらえることになった。新たな一歩はわくわくするが、先の見えない不安な気持ちも同時に押し寄せる。でも、私には、新たな一歩を踏み出す仲間がいる。この1年間そばで見守ってきた彼らの成長に私はたくさん勇気をもらった。一緒に何かをつくり上げる喜びも味わうことができた。そんな彼らが、最高学年として、学校の先頭に立って活躍する。彼らも、わくわくしているかもしれないが、不安な気持ちだってあるはずだ。彼らだって、挑戦している。自問自答しながら、もがきながら頑張っている。そう思うことで、私にはエネルギーがわいてくる。次に会ったときには、「リフジンだ!」と声をあげる彼らにもつと向き合える哲学的な先生になっていようか。理想を語るだけでなく、自分も行動で示すことができる教師になれているだろうか。あの時、子どもたちに贈ったメッセージを今度は自分自身に届けようと思う。さあ一緒に頑張ろう。これからがぼくらの挑戦だ。行くぞ。未来へのトライ!

(粟生小)



編集部から恩師について書いてくれと言われたが、特に思いつかない。私の高校生時代に流行っていた言葉が「デモシカ先生」。「先生くらいシカなれないから、先生にデモなろうか、ということ」で教師になった人」だと。教師のレベル低下が政治課題にされ、その対策として人材確保法案が審議されていた1973年。ちょうど高校2年の時だった。そんな否定的な雰囲気の中で学校生活を送ったせいもあり、教師には関心もなく大学を卒業し、普通の公務員になった。そんな中で忘れられない一人が「山口先生」だ。

私の育った所は、栃木県栃木市。その第三小学校が母校。ちなみにNHKのドラマ「さわやか3組」のロケ地になったことのある学校。

小学校の良い思い出はほとんどない。どちらかと言えば引つ込み思案だった私には学校は重苦しい場所だった。特に団体スポーツ系の行事が嫌で、休むことばかり考えていた。「ちびまるこちゃん」の主人公まるこの心情がとても共感できる。

特に5年生の時は最悪だった。というのも、担任が夏休みの職員

旅行中、不慮の事故で亡くなった。休み明け、担任となったのは退職後の病弱な老先生。学級はバラバラになり、男女間にもギクシャクする流れができた。運動会のフオークダンスで、男女、手を繋がない。見かねた他の先生が指導するが、なかなか言うことをきかない。また、5、6年生が中心となる鼓笛隊のメンバー選考に誰も立候補しない。クラス全員、4年生と同じ

わたしの出会った先生 29

山口先生

リコーダー部門に組み入れられた。今で言えば学級崩壊状態だったと思う。老先生は体調を崩し2か月で、また別の先生に代わった。次の先生はさらに高齢の先生だったが、元氣な先生で、学級もずいぶんまとまることができた。しかし、結局、1年間で3人の担任と遭遇。学校が楽しいという意識は全くなかった。

そして6年生。当時、5年から

6年にかけての学級替えはないのが通常だったが、50人学級から45人学級への学級編制基準変更期にあたり、4学級から5学級に増えるということで学級替えになった。そして3組の担任として出会ったのが山口先生だった。当時32歳。転動してすぐの学級だった。

高木克純



先生が取り組んだのは、「男女とも仲の良い学級づくり」ということだったのだと思う。仲良くし

の中には前方宙返りや後方宙返りなどできるようなった者もいた。持久走では、学校代表に選ばれ市の駅伝大会に出場することができた。

当時、男性教師には宿直業務があった。先生は土曜日の宿直の時、男子児童を誘ってくれた。都合2回、仲間3人と宿直室に泊まった。「8時、だよ全員集合」の後、「キーハンター」というドラマを見て、

た者同士があれこれと理由をつけられては表彰された。男女の区別なく、自然とクラスはまとまった。私にも友達が増えた。

山口先生は教科指導も上手だったのだと今、思う。特に体育。先生は体育が専門だったが、私の体育嫌いを直してくれた。マット運動・跳び箱での腕立て前転。鉄棒での前回り・後回り・ともえといった技ができるようになった。級友

とも思い出た。

中学校に進んでからは、自分の決意もあり、引つ込み思案の所を直していった。生徒会の仕事にも進んで取り組んだ。その土台を作ってもらったのが、山口先生だったのだと、今、思う。

山口先生もご存命ならば、80代半ば。故郷に戻った時、訪ねてみようと思つた次第である。

(川崎中)

一からの旅立ち

みやぎ教育相談センター

松谷三喜子

「合格しました！」満面の笑みで、相談センターに飛び込んできたAさん。傍らでお母さんも安堵の笑みをたたえていました。Aさんは地元の中学校には進まず私立中学校を受験し、努力が実り無事合格しました。

〜いじめが原因で不登校〜

Aさんは、4年生の秋ごろからいじめが原因で登校できなくなり、先が見えず困っていた母親が、知人の紹介で来室されました。母親からいじめの内容と、Aさんの様子、学校の対応などこれまでの経過を聞きました。Aさんはクラスの大半がかかわるいじめにあり、登校できなくなっていました。親からの学校への申請により、学校の指導もあり、形的にはクラス全員から謝られ、いじめの行為はなくなったものの、Aさんにとつて、教室は安心していられる居場所ではなくなっていたようです。心配した母親が学校やスクールカウンセラーに相談しても、本人の幼児性や親への依存などを指摘され、教育委員会に相談しても親身に受け止めてもらえず、どこに相談しても先が見えず、不自信や焦燥感をもっていました。お話を聞いて、相談センターでは、Aさん自身には個別学習や体験を通して、ありのままの自分を表現できる居場所として、母親には親としてAさんのありのままを受け入れていけるように、一緒に考えていきたいと考え、定期的な面談をすすめました。

〜母親に寄り添って〜

毎週土曜日に親子でセンターに通うようになりました。母親は子どもに寄り添っていました。不登校の事実とどう向き合っていたか、ばよいか悩んでいました。また、学校や担任への要求やかかわりをどうしてよいかわからず困っていました。子どもは、親から無条件で認められることで、「自分が自分でいい。自分が好き」という自尊感情と自己肯定感が育ち、自ら歩み始めていきます。そのために親自身の不安や悩みについて話を聞き、思いに共感し、子どものこと、学校のことなど話を聞き、一緒に考えていきました。

面談を重ねながら、学校や担任の対応への不自信を言葉にして吐

き出すことで、自分の思いや、学校に何を求めているか、など整理していきました。

母親からは「学校のいじめ対応に誠意が感じられない。保護者会でいじめについて話し合いをもつことになっていたが、理由もなく別の話題になった。学校からのいじめアンケートに本音が書けない。問題が起きたときの学校の対応や現状が保護者に伝えられていない。担任と話し合いを持ち信頼関係をつくりたい。何とか2〜3時間教室で過ごせるようになったが、時折『○○しないで』というような言葉で遮られる場面があり、みんなに何か言われるのではないかと不安を抱えている」など、学校に対する不信と、何とか関係性をよくしたいという思いが葛藤していました。

新学期、新たなスタートを切ったAさんに希望の兆しが見えましたが、担任との連携もでき良い傾向のように思われましたが、だんだん登校できなくなりました。「クラスの男子から心ない言葉に傷つき、担任を介して謝ってもらったが、怖くて嫌だったと言っていた。娘の行動が相手に不快感を与えたのかもしれないが、教室にいづらさを感じていることも事実。グループの中にも、話し合いの中に入れていない」

子ども同士のトラブルがあった時、お互いに握手をして謝ることはよく見られる光景です。しかし、解決したように見えても、その場ではとりあえず謝ってやり過ごし、また繰り返す子もいるのです。受けたほうも納得がいかないまま嫌な感情を引きずり込んでいきます。当人同士の言葉でその時の思いや感情を語らせることが必要だったのではないかと。相互受容のチャンスを見逃したように思います。このことを機に教室が居場所でなくなりました。登校しても別室でのプリント学習が多く、つまらなく感じて1時間で下校してしま

した。Aさんは学校で友達と一緒に過ごしたいと思っても、自分からは入っていけないジレンマを抱えているようでした。母親は担任からの後押しが欲しいと感じていたので、率直にお願いしてはと言いましたが、担任からのアプローチはありませんでした。

別室登校を続けながら、校外学習には参加していました。学習そ

相談センター

相談センター報告(第20回)

のものには興味や関心があり参加したものの、グループ活動やお弁当の時間は、日ごろから交流がないので仲間に入りやすく孤独感を感じたようでした。

冬休み明け、どんな心境の変化があったのか教室に入れるようになりませんでした。母親は「周りの様子を客観的に見ているようだ。少しおとなになつてきたのかな?」と感じていたようです。本人もパートナーの相談員に「私、教室にいってるの〜」と嬉しそうに話していました。しかし、翌週、友達の心無いきつい言葉に傷つき登校できなくなり、結局再び別室でプリント学習主体の学校生活に戻ってしまいました。年度末に渡された通知表にも誠意を感じられず、学校への期待は裏切られ、残念さと不信感が増していきました。

「今まで、学校の体制への不満や不信、子どもとの向き合い方など、相談センターで自分の考えに共感してもらえて、親として子どもに安心感を与えられるようになってきたのでありがたく思っています。なぜ学校も相談センターのように、親と子の思いに共感して話し合えないのか、日々疑問を持っています。進級しクラス替えや担任が変わっても同じ対応が繰り返され、不登校の状態が続いていても、いじめや不登校の子どもたちにもどのような支援をしているのかが見えません。話し合いを持って、共感し親身に受け止めてもらつたという実感はありませんでした。幸いAも毎週センターに来ることを楽しみに待っています。勉強のことよりも、いろいろな体験を通して成長を感じられます」と話してくれました。

ほぼ毎週、親子で通いました。母親の不登校への不安や子どもの将来への心配を少しでも軽減できればと、思いや考えを受け止め一緒に話し合ってきました。焦らずありのままを受け入れ、学校に行けない時は無理をさせず、精神的にも時間的にもゆつたり過ごし、遊びや楽しいことをたくさんしていました。母親自身も自分の思いを語るという経験はあまりなかったように思います。家族以外の第三者に肯定的に受け止めてもらい、精神的な支えと背中を押してもらえたと話していました。

Aさんは母親の面談中、豊富なアイデアと経験の持ち主のパートナーのS相談員と共に楽しい実験や工作、簡単な料理作りを中心に

隠れている可能性を引き出していきました。はじめのころは大人主導であったのが、自分から〇〇したいとリクエストしたり、自分が教える立場になるなど、成長を感じられました。学校での刺激のない生活では味わえない、いろいろな体験や経験を通して興味関心の幅が広がりました。家庭では母と一緒に映画を見たり、旅行をしたり、図書館にも通い読書家です。ギターにも興味を持ち、S相談員に月1回、ボランティアで教えていただき、目まぐるしく上達してきました。

〜チーム相談センターのサポートで〜

卒業年を迎え、夏休み明けごろに進路の相談を受けました。地元中学校は、小学校の延長になるので、本人の希望があれば私立を考えているとのこと。賛成でしたが学力のハードルが高いのは事実でした。2年以上教室で授業を受けていないのです。それを補うため、本格的に学習に取り組むことになり、国語はK相談員にお願いし、算数はパートナーのS相談員が受け持ち、週3回通つてきました。まさにチーム相談センターの学習支援です。Aさんの相談センターから新しい居場所への旅立ちを祝い、これからも応援していきます。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・
家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき9時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。



おすすめ映画

「ある少年の告白」

「ある少年の告白」は、ガラルド・コンリーのノンフィクションをもとにした2018年のアメリカ映画である。



主人公のジャレットは両親ともども熱心なキリスト教徒であるが、自分がゲイであることを自覚し、両親と衝突する。両親によって同性愛者の矯正プログラムに参加せざるを得ない状況に追い込まれる。しかし、それは非人道的なプログラムであった。ジャレットは追い詰められ、セロピストと衝突し、母親に助けを求める。同性愛は神に背く行為であり、矯正できるものと信じている父親、母親は夫の考えをそのまま受け入れているが、ジャレットの悲痛な叫びに息子がゲイであることを受け入れるようになる。だが、父との関係は完全な和解はないままだ。

印象深かったのは、父親の依頼でジャレットの血液検査をする事となった女性医師の言葉である。彼女は敬虔なキリスト教徒であるとともに、医学を学んだ者として、そのバランスをとることの難しさを語りながら、「あなたには何の問題もない。健康体の男の子よ。(中略) プログラムに行くかどうかは、あなたが決めることよ。18才だもの。」とアドバイスをする。この言葉が彼の後々の行動を支えているように思う。

映画のエンドクレジットには、映画完成時でもこのような施設が全米で36州が認可していて、70万人が矯正治療の影響を受けているとある。日本人が勝手に持っているアメリカに対するイメージと現実を気づかせてくれる。

(佐々木忠夫)

センターの動き

〈1月〉

- 5日 宮城民教連冬の学習会
- 10日 公開授業参加高校生に当日の案内を送付
- 14日 「市民の会」事務局会
- 17日 第15回事務局会、つうしん97号発送作業、公開授業当日の役割分担など協議
- 18日 『教育』を読む会
- 21日 山極さんの公開授業・配布物や名前プレート準備、公開授業申し込み1名、ホームページにつうしん97号アップ。カマラードに先生の名前を見つけたと教え子の訪問あり。ホームページが教え子と恩師を結び、
- 22日 公開授業会場を事務局員で最終下見
- 25日 公開授業。高校生31名、一般40数名参加。夜、山極さんと懇親会
- 26日 「条件整備調べる会」学習会
- 27日 「ゼミナルstube」。モンテソーリの教育思想に入る
- 31日 第16回事務局会、高校生公開授業の総括、つうしん97号の合評、並びに次号98号の内容検討

〈2月〉

- 4日 「市民の会」事務局会、市教委の学力テスト、給食

費値上げについて協議

- 6日 臨床教育学会調査研究打合せ。田中さん上田さん土屋さん来室
- 8日 『教育』を読む会。午後からGODO教研参加で茂庭荘へ
- 14日 午前、「市民の会」による学力テスト中止の請願提出。午後、第17回事務局会。来年度の活動を見据えて運営委員会の役割や位置づけ、どんな取り組みが必要かなど意見交流
- 15日 民教連代表者会、教科書問題検討委員会
- 16日 「道徳と教育を考える会」例会。中学校道徳に関する論文を中心に読み合わせ、話し合う
- 17日 宮川健郎先生から紹介の『児童文学を活用した教員養成プログラムの開発プロジェクト』研究討議に参加のため、宮城教育大学へ
- 18日 前日のプロジェクトに関連した附属小学校での「物語体験ワークショップ」に参加。「春のつどい」田中孝彦講演会配布資料準備
- 22日 「春のつどい」田中孝彦さん講演会開催
- 25日 「ゼミナルstube」
- 26日 「市民の会」給食費値上げに関する要請書提出および懇談。宮城の会で、市教委にゆきとどいた教育条

件整備の署名を提出・懇談

- 28日 「震災のつどい」実施の是非について協議。中止にすることに決め、ホームページで告知
- 29日 「3・11震災のつどい」中止のため昼過ぎまでセンターで待機。NHKの取材クルー来る

〈3月〉

- 02日 新型コロナウイルス対策で、県内小中高の一斉休校開始
- 5日 高橋達郎さん来室
- 6日 運営委員会開催日を24日に決定。案内文書を送る
- 10日 「市民の会」事務局会
- 13日 事務局会議。コロナでの学校一斉休校に関連し、突然の最後の一日となった学校の対応や教師の受け止め方など情報・意見交換
- 14日 『教育』を読む会
- 16日 「ゼミナルstube」
- 23日 数見代表 来室。運営委員会の持ち方・内容について最終打ち合わせ
- 24日 研究センター第2回運営委員会、人事案件を含め協議
- 27日 今年度最後の事務局会、運営委員会の内容など報告、意見交換。つうしん98号の初稿入る

(菅井)